当財団の「アドミュージアム東京」資料室には、さまざまな企業PR誌が所蔵されています。
その中から優れたものを取り上げ、それがどのような企業個性を表し、時代を捉えているかを探ります。

松屋呉服店『今様』1909年、1913年

正月らしい豪華内容の新年号

松屋呉服店のPR誌『今様』大正2（1913）年1月1日発行号（第8年新年号）は、正月にふさわしい豪華な内容です。

松屋呉服店は明治40（1907）年、今川橋に東京初の本格的デパートメントストア方式の外観を備えた建物を造った百貨店です。大正2年発行のこの号には松屋らしい先進性と都会的な感覚が横溢しています。正月なので、「本号は営業上の事を差し控え諸大家の玉稿を掲げ家庭の読み物となして進呈いたし候」とあり、通常の商品案内中心とは違った内容になっています。

表紙は、矢澤弦月の「春」という題のモダンなデザイン。

冒頭にビジュアルなページを配します。色刷りの口絵・鏑木清方の「若き夫人」、田村彩天の「若き日」は、どちらも和服の艶やかな女性像。続いて写真版「新春四題」「新年の松屋呉服店」「カルタ」「羽子板屏風」と正月らしい風物が並びます。

「文芸欄」の最初は、文学博士・遠藤隆吉の「心の技術」です。［心の中のデパートメント］［使われる時は使う人の心になれ］［流行は模倣と暗示の力による］［流行は循環するもの］［流行の先駆］［流行はただ枝葉形式のみ］［自殺にも流行がある］［心を広くして流行を作れ］［良習慣は無形の資本なり］［人情に通ぜざる欠点］［東洋人と西洋人との得失］という項目で心の持ち方について提案しています。

三輪田高等女学校長・三輪田元道の「新年に感じた社交と情誼」は、自分の体験を通じて情誼をもって社交を行う大事さを述べます。

跡見高等女学校長・跡見花蹊の「様々の春景色」は、正月の婦人の礼儀作法などの心得を具体的に記します。

貴族院議員子爵・前田利定の「忘れられぬ新年の旅行」は、修善寺旅行の際の乃木将軍との出会いの様子を細かい描写で記録し、無言の教訓としています。

文学博士・幸田露伴の「女と力」は、女子の力を男性とさまざまな角度から比較し、婦人の役割と特性を自覚することの大切さを語っています。

鳩山春子の「新年に際して」は、新年の心持ち、遊戯、男の子と女の子の育て方などを自らの家庭の流儀に即して記述します。

女子高等師範学校教授・下田次郎の「美と生活」は、美とは何かを考察し、美しく生活することを心がけるよう勧めています。

松屋呉服店庶務部長・山本龍造の「女と職業」は、婦人が職業に従事することが今日の時代の必然的要求であり、女性の幸福の途であることを述べ、どのような職業を選ぶべきかその3条件を示します。そして松屋呉服店の女店員がどのように仕事に従事しているかについて記します。

太田杏村の「七福神の説」は、「七福神の中で商業の守護神として世の尊敬を受けているのは恵比寿大黒の二神である」という文から始まり、それぞれの神を紹介し、七福神詣にも話を展開します。

近藤蕉雨の「紋章瑣談」は、紋付羽織袴の必要なこの時期に紋章について記述します。［紋章の起原］［紋章の種別］［定紋と替紋の由来］［紋の種類］［紋章の効用］という項目で歴史的にわかりやすく説明された、中身の濃いエッセイです。

大正2（1913）年1月1日号の表紙

以上、「文芸」欄は10編の文章を並べ、実用的で教養にも資する多彩な内容です。

人気の筆者が揃った和歌・小説

「和歌」は、文学博士・佐佐木信綱の「春の宵」です。「春の宵仰ぐみそらの星影に忘られはてしわが憂いかな」という歌から始まる29首の情感に満ちた恋の物語です。

「小説」欄は、5人の当代人気作家が並びます。広津柳浪の「羽織のお金」は、ほろりとさせる人情噺。半井桃水の「奇縁」は、日露戦争、乃木将軍にまつわる奇縁の話。この時期の読者の関心をうまく材料にしています。

饗庭篁村の「心の錦」は、紅葉狩りの男女の会話を軽妙に綴っています。黒田湖山の「滑稽大島紬」は、松屋のコマーシャル入りで軽い痴話話を読ませます。井手ゆり子の「お雪さん」は、隣に

おかだ よしろう● 1934年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。56年電通入社。コーポレートアイデンティティ室長を経て電通総研常任監査役。98年退職。70年の大阪万博では、「笑いのパビリオン」を企画。80年代は電通のCIビジネスで指導的役割を果たす。著書に『社会と語る企業』(電通)、『観劇のバイブル』(太陽企画出版)、詩集『散歩』(思潮社)、『世界一の映画館と日本一のフランス料理店を山形県酒田につくった男はなぜ忘れ去られたのか』(講談社)など。

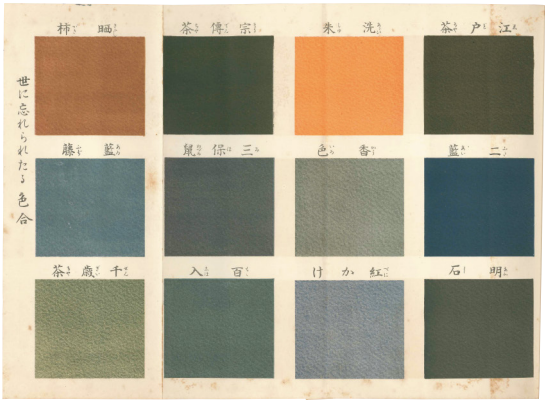
住む雪さんという娘の悲しい話です。

小説欄は、軽い話、ちょっぴり重い話を取り混ぜ、楽しく読ませます。

「脚本」は、秋田雨雀の「短き夢」です。新派調の一幕物の芝居を見るようです。この時代、脚本を読者に読ませたのが興味を惹きます。

「懸賞募集に就きて」というページで、『今様』編集部の細田孤眠が全国の女学校から小品文、和歌、絵画の3種を募集したことを報告しています。小品文117編、和歌241首、絵画46題が集まり、入選者を決定しました。和歌と小品文の入選作品が掲載されています。女学生に参加を求めるのが大正初期の新しい時代風潮であり、松屋らしさなのでしょう。

180ページほどの充分な厚みを持った冊子で、内容のほとんどは“家庭の読み物”として構成されていますが、随所に松屋の案内がちりばめられます。玩具部は、「お正月の娯楽品　かるた、双六をはじめとしてお子様方のお遊び品一切取り揃え」、洋服部は、「熟練せる裁縫技師を迎え英米共に最新の型を調達致すべく」また「マントの流行　外出の御用にはぜひ」、雑貨部は、「洋服用付属品（ワイシャツ、ネクタイ、カラー、カフス釦、靴下、シャツ類）年始の贈答品、必要品悉く取り揃え」、などと新しい部門の紹介をしています。巻末の「営業案内」には、「店内の陳列場は三分して階下には木綿太物絹の類および洋品、陶器、洋傘、化粧品等を連ね、二階は一面に絹織物、帯地類ならびに新柄流行品をかわるがわる陳列し。三階は寄せ裂見切反物および小間物類。漆器。玩具。下駄傘等の品類をつらぬ又五十銭均一の売品をもって充たせり」



明治42(1909)年12月31日号の表紙と記事「世に忘れられたる色合い」

と幅広い品揃えをうたいます。

また「出張販売予告」として、千葉、茨城、埼玉、栃木各県下に新年早々出張販売をする旨を予告し、「通信販売」も詳細にその仕組みを説明しています。

『今様』は、松屋呉服店のファンづくりのツールであるとともに、顧客層を広げる積極的なプロモーションの道具として機能したと思われます。

コンパクトながら多彩な企画

『今様』明治42(1909)年12月31日発行の「冬乃巻」は、68ページほどのコンパクトな通常号です。

興味深い記事として、衣服の上に表れた「色合いの変遷」と題して、明治初年は葡萄鼠、10年前後は藍鼠または港鼠と呼び藍に少し赤みのかかったのを当世と称し、20年に至り藍づくめに変化し30年以後は松皮鼠紫根色に移り、紫根は40年まで流行したと時代に合わせた色の変化を細かく観察しています。そして「世に忘れられたる色合いの中で現代の趣向に副うべき十二種の色合い」を色刷りの写真版で紹介しています。「江戸茶、二藍、明石、洗朱、香色、紅かけ、宗伝茶、三保鼠、百入、晒柿、藍藤、千歳茶」、この色合いは文化の初年から安政の間に生まれ、よく世間に流れ行き渡ったといいます。

「渦巻模様の流行」は、近ごろ流行が目覚ましい渦巻模様について歴史的に考察し、さまざまな視点から解説します。

「お嫁入りの支度について」は、新調の標準の参考を記しています。[今の裾模様][模様の工夫][裾模様の地質][縮緬の選択][徳用向き][模様地の縮緬][小紋地の縮緬][羽織地の縮緬][友禅縮緬][紡績混りの縮緬]という項目ごとに選ぶ要点をアドバイスします。

「温故知新」は、昔からの習慣について説明します。[松飾と注連縄][歯固めの鏡もち][蓬莱喰積][雑煮と屠蘇][六日の歳越][万歳][鳥追い]という項目それぞれに解説しています。

『今様』は、楽しく読ませながら随所に新しい商品情報をちりばめ、百貨店の中を散策するような娯楽的空間を作り出し、松屋呉服店の個性が伝わるPR誌となっています。

＊引用箇所の表記は新字・現代仮名遣いに変更
＊タイトルと著者名が目次と本文で異なる箇所については、目次の表記を採用しました